セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 24

編　集　1992.1.15
発　行　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　田　中　猛　善
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
電話 0955—43—3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

色絵雲龍文皿（いろえうんりゅうもんさら）

館蔵資料

有田皿山
18世紀前半
口径32.7cm　高さ6.6cm　底径18.3cm

素焼きされただけのような素地に上絵付を施した特異な色絵皿である。見込み中央の丸窓内に牡丹文を配し、周縁部に龍、如意雲、宝珠、七宝、鳳凰文などを描き、間を四方襷地文で埋める。裏面にも唐草文をびっしりと描き、高台内に「VOC」銘を入れる。有田町・赤絵町遺跡で同様の技法の色絵片が出土したため、有田産と判明した。

〈平成３年度特別企画〉

「肥前の色絵 —その始まりと変遷—」展

10月19日から11月24日まで、第１・２・３展示室において、「肥前の色絵—その始まりと変遷—」展が開催されました。

肥前の色絵磁器は17世紀中頃に有田の地ではじまったといわれ、端麗・優美な名品を数多く生み出し、日本陶磁史上でも特筆すべき分野を確立しました。本展では、肥前の色絵に関する最近の調査・研究の成果をふまえ、副題にもあるように、その初期から、盛期、江戸後期にいたる変遷をたどるものです。

肥前の色絵磁器189点、消費地遺跡出土の色絵磁器片85点、窯跡出土の色絵磁器片45点、赤絵町遺跡出土の色絵磁器片281点、赤絵町遺跡関連の色絵磁器13点が展示されました。

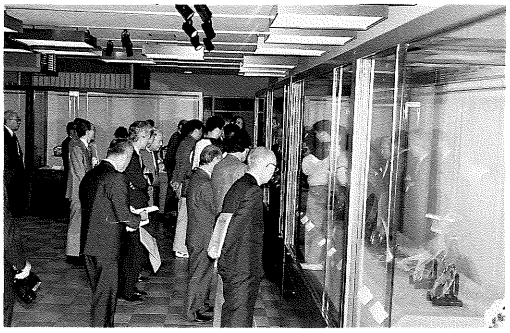
肥前の色絵磁器に関する研究は、近年大いに進展しました。それは古窯跡や消費地遺跡の調査によって、考古学的資料が増加し、またそれらにより伝世品に対する考察が深まり、編年がより緻密なものとなったことによるものです。本展の展示構成も基本的にこのような方向にそうもので、そのために紀年銘を記された資料など年代の明らかな色絵磁器を多く紹介することとし、伝世品と出土陶片資料との比較・照合もできるだけ行ない、それらを展示・紹介することとしました。

本展では、肥前の色絵の流れを一般の方々に理解し易いように、伝世品の展示コーナーに、７つの区分パネルを設け、短い解説を付けました。以下、タイトルだけを紹介します。①色絵の始まり、②青手古九谷様式の出現〔1650年代〕、③輸出色絵と金銀彩の始まり〔1655～60年代〕、④柿右衛門様式と鍋島藩窯様式の完成〔1660～90年代〕、⑤染錦手の盛行〔1690～1740年代〕、⑥国内市場への転換〔1750～1810年代〕、⑦色絵具の種類の増加と幕末の輸出色絵〔1810～60年代〕

また陶片展示コーナーでは、東京大学構内遺跡出土の色絵磁器片をはじめとした消費地遺跡や肥前古窯跡出土の色絵磁器片、有田・赤絵町遺跡出土の色絵磁器片など多数の陶片資料を展示しました。

華やかな色絵の数々に堪能するとともに、陶片資料にも熱心に見入る姿が見られ、32日間の会期中に15,157名の入観者を数え、盛況の内に無事、終了しました。

開会式・テープカット風景



展　示　風　景

東洋陶磁学会 第19回大会の開催

10月26日・27日に講堂において、東洋陶磁学会第19回大会が開催されました。

今回のテーマは、当館で「肥前の色絵」展が開催中ということもあり、「江戸前期の色絵磁器」で、当館学芸課長大橋康二の記念講演「江戸前期の色絵磁器」を皮切りに、有田町教育委員会の村上伸之氏の「赤絵町遺跡の調査成果」など、色絵磁器に関する研究発表が行われました。27日の午後には林屋晴三氏（元東京国立博物館次長）の司会で、楢崎彰一氏（名古屋大学名誉教授）など４名のパネラーによる公開討論が行われ、活発な意見が交わされました。

公開討論での最大の争点は、何といっても古九谷の産地論争で、一部に慎重な意見も聞かれましたが、大勢としては、古九谷様式の色絵磁器が有田産であるとの認識が支配的で、これを受けて、このことを学会としての見解とすることで討論の締めくくりとされました。学会での結果は、各新聞紙上でも報道され、話題性の高い大会でした。

行事・展覧会報告

柴田コレクション展（Ⅱ）

９月７日から10月13日まで、第１・２・３展示室において柴田コレクション展（Ⅱ）が開催されました。

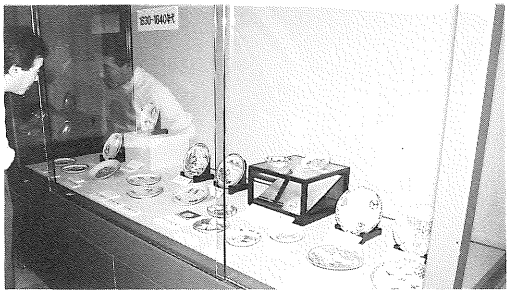
この展覧会は、柴田明彦・祐子ご夫妻から寄贈いただいたコレクションを、昨年のパートⅠ展に引き続き展示するものです。

パートⅠ展では、五寸皿・変形皿を中心に471件・1,343点が展示され、その質の高さ、豊富な内容に驚嘆の声も聞かれました。今回はパートⅡ展に向けて、コレクションをより充実したものにしたいという柴田氏の考えで、新たに208件299点が追加寄贈され、合計819件1,543点が展示されました。

パートⅡ展では七寸皿を中心に、壺・瓶・小皿・鉢など多彩な内容で、また追加寄贈の作品は初期伊万里様式、古九谷様式が多く、磁器創業期からの有田焼の流れがより明確に理解できるようになりました。

９月７日に開会式が行われ、柴田夫妻に紺授褒章が授与され、土居教育次長から伝達されました。また34日間の会期中に16,529名の入館者を数え、好評のうちに終了しました。

開会式・テープカット風景



展　示　風　景

柴田氏を囲む ミニコンサート

柴田コレクション展（Ⅱ）の会期中の９月25日に、柴田明彦氏を迎え、講演とミニコンサートを講堂で行いました。

柴田氏は「柴田コレクションについて」と題して、約40分間、講演され、同コレクションの内容や寄贈を決意した経緯などを、現在の肥前磁器の研究状況を織り交ぜて説明しました。

講演のあと、九州交響楽団のメンバーによる弦楽五重奏があり、モーツァルトの「アイネ　クライネ　ナハト　ムジーク」をはじめ、７曲の室内楽が演奏されました。柴田氏自身、熱心なクラシック音楽のファンということもあり、集まった約280名の方々と共に演奏を楽しんでいました。

演奏者のメンバーを紹介します。

バイオリン：杉本裕江さん、佐藤美和さん

ビオラ：古瀬幹雄さん

チェロ：本田實さん

コントラバス：深沢功さん

柴田氏の講演

コンサート風景

インドネシアからの研修生受入れ

国際交流基金の援助によるインドネシアからの研修生３名を受入れました。EKOWATI　SUNDARI（ジャカルタ国立博物館陶磁室長、愛称エコーさん）、YUSMAINI　ERIAWATI　J.（インドネシア国立考古学研究所、愛称ワティーさん）、WIDIATI（インドネシア文化庁文化財保護部、愛称ウィディーさん）の女性３名で、６月30日から２ヵ月間、当館で肥前陶磁について研修しました。期間中、小森窯跡（西有田町）の発掘調査に参加しましたが、夏の暑い時期、しかも傾斜地という条件の悪いなかでの調査で、とまどうことが多かったと思いますが、精力的に作業されました。また当館や有田町所蔵の膨大な肥前古窯跡出土の陶片資料の整理及び研究にも取りくみ、帰国の際には、片言の日本語と肥前陶磁に関する研究成果を携えて、無事に研修を終了しました。

発掘調査に参加したインドネシアからの研修生３名

博物館学実習

平成３年度の学芸員実習は、７月22日から８月11日まで行われました。受講生は西南学院大学の池田智子さん、宮原ひとみさん、中山弘基さん、佐賀大学の川内亜希子さん、中島健次朗さん、大宅富子さん、佐賀県立有田窯業大学校の藤本能弘さんの７名でした。

館内施設見学からはじまり、陶磁概論、企画展準備や飾付実習、また陶片整理や古窯跡見学、さらに陶芸実習とカリキュラムを次々とこなしてゆき、実習の最後のころは少々疲れぎみの様子でしたが、全員、無事に３週間の実習を終了しました。

実習生の皆さん

第19期・第20期陶芸教室

第19期陶芸教室（平成３年６月１日～８月３日・講師は大宅利秋先生）、第20期陶芸教室（同年８月17日～10月19日・講師は橋口誠先生）が開催されました。

手びねりや板づくり、ろくろ成形など、また高台削りや釉薬調製、窯積め等、ほとんどの方が初めての経験でしたが、講師の先生の指導よろしく、熱心に作陶に励んでいました。８月３日と10月19日の修了式には修了証書の授与の後、作品講評も行われ、各自、苦心談に花がさいていました。

第19期の皆さん

第20期の皆さん

シリーズ
やきものにみる文様 (21)
太湖石文様（たいこせきもんよう）

「日本国語大辞典」によると、太湖石は石灰岩の一種。中国の太湖から産出したのでいう。洞庭湖などからも産出し、特に水の浸食により奇怪な形をしたものを庭園や植木鉢に置いて鑑賞用とする。わが国では岐阜県明星山から産出されるという。

『旧唐書・白居易伝』には白居易（772～846 字は楽天）が刺史として蘇州に行った時、太湖石を五つ得て帰ったという。この頃すでに愛玩されていた。

太湖は中国江蘇省南部と浙江省との境にある湖の名で、湖には七十余りの小島がある景勝の地。

「大漢和辞典」によると、太湖は湖の名。古の震澤。又、具區・笠澤・五湖ともいう。湖中には小山が多く、其の上には多くの果園があり、景色がすぐれているので、世に洞天福地という。『読史方輿紀要、江南、大川』には、太湖は蘇州府の西南三十里、常州府の東南八十里、浙江湖州府の北二十八里、（中略）、縦広さ三百八十三里、周囲三万六千頃（頃は田の広さの単位、百畝ときに十二畝半）とある。

太湖石については、峯・渓・洞などの形をした石で『揚州画舫録』には、太湖石は太湖の中にある石骨で浪の激しさと永い年月によって自然に穴があき、水中にあるので運ぶのがむずかしいと述べている。

写真は柿右衛門様式の鉢であるが、中央下部に二つその左に一つの太湖石を配置している。

狩野派の絵画によく見られる図柄のひとつである。簡略化がすすむと、輪のように描いて、本来それが岩であったことがわからなくなっているのもある。

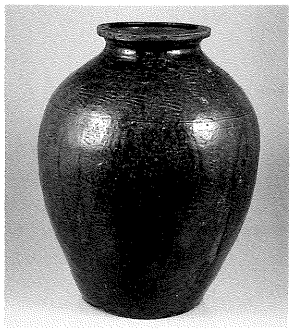
色絵松竹梅文輪花鉢（柿右衛門様式）
有田焼・南川原山　17世紀末～18世紀初
館蔵　（吉永　陽三）

シリーズ
やきものの技法 (21)
叩（たた）き

叩き木と当て木で器の内と外から叩きながら成形する技法。粘土を叩き締めるため、軽くて丈夫な器ができる。叩き木と当て木は、土離れを良くするために、刻みを入れるが、これにより器の表面に繰り返しの陰刻文ができる。この凹凸が叩きと見分ける基本となる。結果的には装飾的な効果をもたらす。

叩きの技法は紀元前からあり、中国の仰韶時代の土器にはその技法が既に用いられている。日本では、弥生時代に朝鮮半島から伝わり、古墳時代の須恵器にも叩きの技法が見られる。叩きは中国、朝鮮、日本の他、タイやミャンマーなどインドシナ半島、あるいはアフガニスタンまで広く分布している。

日本の陶磁史においては、須恵器の時代までは盛んに用いられたが、中世においては衰退し、16世紀末から17世紀にかけて、再び朝鮮から導入される。このときは九州を中心とした技術導入であり、唐津焼（佐賀県）、高取焼（福岡県）、苗代川焼（鹿児島県）などで叩きの技法が始まった。また唐津や苗代川では、叩き木と当て木のことを、シュレーとトキャーと呼び、朝鮮の道具の類似性とともに名称も共通している。



叩き青唐津壺
唐津焼　17世紀初頭
高さ41.5cm
館蔵

叩きの技法は、粘土の塊に拳や石で凹みを付け、それを叩き延ばしていく成形法もある。しかし一般的には、まず底に板状の粘土を置き、その上から紐作りで輪状に積み上げ、ある程度の高さになってから両側から叩き締める。これを繰り返して希望の高さの器にし、最後は叩きではなく、手でロクロ仕上げを行う。したがって叩きでできる基本的な形は、本来口の大きいものであるが、ろくろ仕上げによって口の小さい瓶や、口部の複雑な形態の水指などができる。(鈴田由紀夫)

〈速　報〉

西有田町小森窯の調査

当館の平成３年度肥前地区古窯跡調査は、西有田町大木所在の小森窯を対象として行った。期間は1991年７月８日～７月19日であり、インドネシアの研修者３名を混えての発掘であった。山林に陶片などの散布範囲が広かったため、当初は２基の窯体があるのではないかと推測していたが、結局、北側の谷状に低まったところにいくらか盛り上がった部分があり、そこで１基の窯体を発見したにとどまった。窯体は３室分だけ確認したが、焼成室は幅が約2.3m、奥行約2.6mの平面縦長形であった。焼成室の奥の方は地山を掘り凹め、前の方は角礫を基礎にして地山の粘土を盛土して窯壁を築いていた。火床の保存状態は悪いが、推定幅は30cm程度であり、床は灰色に硬化していた。砂床は奥へ向かって、約９度の勾配で上っている。木口（製品の出入口）は向って左側とみられる。温座の巣は残っていなかった。砂床面から温座の巣までの奥壁の高さは80cm程度と推測される。

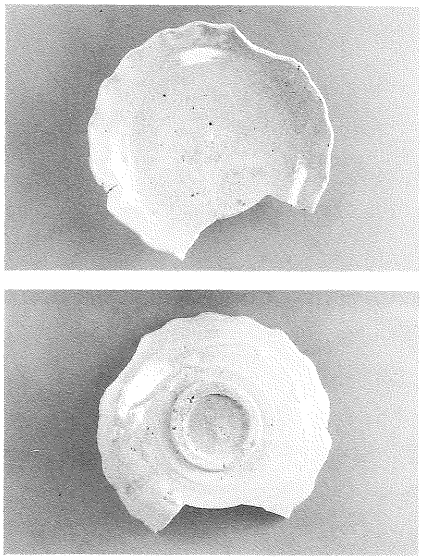
製品内容は唐津陶器であり、灰釉、長石釉、鉄釉がある。器種は碗・小皿が主であり、他に中・大皿、猪口、スリ鉢、甕などがある。装飾法としては鉄絵が少量みられる。

窯詰め法には胎土目積みがみられ、砂目積みはまったくみられない。窯詰め道具はトチンとハマであり、サヤはみられない。道具の上にはモミガラを敷いたものが多く、製品の高台周辺にもモミガラの熔着痕が認められる例が多い。

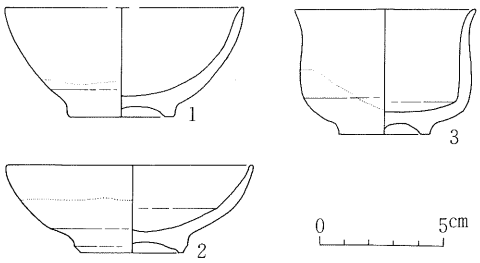
以上のように、小森窯は胎土目積み段階（1580～1610年代）の窯であり、比較的短期間に操業した窯と推測される。焼成室幅や焼成室平面縦長であること、砂床の勾配が強い点などは砂目積み段階(1600～30年代)以前の特徴を備えている。今まで胎土目積み段階だけで終る窯の調査例が少ないため、胎土目積み段階の窯構造の特徴を確定できなかった。その意味でこの窯の調査は重要であった。しかし、奥壁の高さが高い点など砂目積み段階の窯構造に近似しており、胎土目積み段階の窯であっても、かなり砂目積み段階に近いように思われる。

（大橋康二）

小森窯跡（南より撮影）



小森窯出土の唐津灰釉波縁皿



小森窯出土の唐津灰釉碗・皿・猪口

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始(12月28日～１月４日)休館

観覧料　一般200円（150円）／大学・高校生150円(100円）／中・小学生70円（50円）／( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。

交　通　佐世保線有田駅下車徒歩10分